

鳥取への愛着を育てる教材開発

ー 岡野貞一《ふるさと》に着目してー

杉本友梨*・鈴木慎一郎**

The Development of Aids for Attachment to Tottori
: Focusing on “Furusato” by OKANO Teiichi

SUGIMOTO Yuri, SUZUKI Shinichiro

キーワード : 鳥取, 愛着, 《ふるさと》, 岡野貞一, 視聴覚資料

Key Words : Tottori, Attachment, “Furusato”, OKANO Teiichi, Visual aids

はじめに

近年、鳥取県では県内出身の音楽家に注目が集まっている。大阪音楽大学の創立者で、関西の音楽発展に尽力した永井幸次（1874～1965）、《大黒様》や《金太郎》などの童謡を作曲した田村虎蔵（1873～1943）、そして《ふるさと》や《もみじ》などを作曲した岡野貞一（1878～1941）である。2013（平成25）年は田村虎蔵生誕140周年にあたり、県内で多くの企画やコンサートが催された。また、2014（平成26）年は岡野貞一作曲の《ふるさと》が誕生して100周年にあたり、こちらも県内で様々な催しが行われた。

この中でも鳥取県民にとって特に馴染みのある曲の一つと言えるのが、《ふるさと》ではないだろうか。この曲は、鳥取市でも昼の12時を告げる時報のチャイムとして採用されており、毎日耳にする人も多い。街のコンサートなどで演奏されることもしばしばである。また、2014（平成26）年には久松公園入口にある「ふるさと音楽碑」がリニューアルされ、地元アーティストや有名歌手が歌う8パターンの《ふるさと》が聴けるようになった。このように、鳥取県が力を入れて発信している《ふるさと》であるが、その認知度は鳥取県外でも高いことを、嶋田由美¹と、吹浦忠正²が行った調査で明らかになっている。

では、教育分野において《ふるさと》はどのように位置づけられているのだろうか。この曲は、1958（昭和33）年告示の小学校学習指導要領から現在に至るまで、第6学年の共通教材となっている¹。とはいえ、その学習の仕方は教師や学校、地域などの違いによって様々である³。

さて、鳥取県はこの《ふるさと》を作曲した岡野貞一の出身地であり、童謡・唱歌とおもちゃをテーマにした博物館である「わらべ館」があるなど、童謡・唱歌を重要な地域資源の一つとして発信している。しかし、教育分野において《ふるさと》や岡野貞一を扱う機会は、音楽の授業を除けばあまり多くない。《ふるさと》と鳥取とのつながりを知っている子どもはどのくらいいるのだろうか、《ふるさと》を作曲した岡野貞一の生き方を知っている子どもはどのくらいいるのだろうか、と

* 湯梨浜町立たじりこども園

** 鳥取大学地域学部地域教育学科

いう疑問が生まれてきた。

岡野貞一を扱った教材としては、鳥取市が発行している道徳の副読本『鳥取市の志』がある⁴。だが、これは道徳の授業での活用を主としているため、岡野貞一の生涯が文章を中心に書かれており、楽曲の掲載は見られない。また、現在、教育芸術社⁵と教育出版⁶の2社から出版されている小学校教科書の中の《ふるさと》の掲載については、いずれも歌詞やねらい、写真の掲載などにとどまっている。

そしてここで、鳥取県に関するもう一つの話題に触れたい。それは近年問題になっている、鳥取県における少子高齢化と人口減少についてである。2015（平成27）年11月現在の推計人口569,977人で、人口が57万人を割ったのは1971（昭和46）年以後のことである⁷。特に、若者の県外流出は深刻で⁸、筆者の杉本の友人もその多くが県外へ進学、就職している。

これらのことから、音楽の授業の中で《ふるさと》や岡野貞一と鳥取とのつながりを取り上げることで、改めて曲の魅力を知り、またその《ふるさと》を作曲した岡野貞一や、子どもたち自身の“ふるさと”でもある鳥取への誇りや愛着を高めることが出来ないかと考えた。加えて、子どもたちが自分の暮らす郷土を見つめ直すきっかけや、県外へ出て行った若者が鳥取を思い出し、いつか鳥取へ戻ってきたいと思えるようなきっかけを、音楽の授業を通して作ることはできないだろうか考えた。進学や就職、結婚などを機に故郷を離れ、その良さに気づいたり恋しさを感じたりする人は多いが、鳥取での生活が日常になっている子どもたちにとって、“故郷を見つめ直す”機会はありませんのではないだろうか。

そこで本研究の目的は、《ふるさと》を題材に、鳥取県出身で《ふるさと》の作曲者である岡野貞一や地域との関連を取りあげ、鳥取への愛着を高めることができるような教材開発を行い、実践を通してその有効性について明らかにすることとした。

研究方法としては、《ふるさと》や岡野貞一を題材とした教材の開発を行い、鳥取大学附属小学校6年生での授業実践を行う。その後、授業実践の記録と授業後の児童のふり返しシートを基に、教材の有効性について検討する。

1. 《ふるさと》を題材にした教材開発

本研究では、視聴覚資料として以下の3本のDVD教材を開発した。

(1) 視聴覚資料①「岡野貞一の生がい」

視聴覚資料①「岡野貞一の生がい」は、岡野貞一の生涯を紹介する資料である。長さは3分10秒で、筆者の杉本によるナレーションを入れている。ナレーションの挿入理由は、この視聴覚資料では、写真というよりも岡野貞一の生き方や、岡野貞一の成し遂げたことの偉大さを児童に感じ取ってほしいと考えたからである。またナレーションは、鳥取市教育委員会発刊の道徳の郷土資料集『鳥取市の志』における高学年用資料『音楽に一生を捧げた人生～岡野貞一～』を参考にしている⁹。その理由は、《ふるさと》が第6学年の共通教材であること、資料の内容が本研究の目的により近いものであることである。BGMには岡野貞一／作曲、高野辰之／作詞《朧月夜》のカラオケを使用した。

(2) 視聴覚資料②「岡野貞一ゆかりの地をめぐる」

視聴覚資料②「岡野貞一ゆかりの地をめぐる」は、《ふるさと》や岡野貞一にゆかりのある場所や石碑などを紹介する資料である。長さは2分22秒で、写真にテロップを入れている。この視聴覚資料においては、児童には風景に注目してほしいと考え、ナレーションではなくテロップを入れる

ことにした。またテロップは、児童が実際に鳥取市内を歩いている気持ちになれるような文章を考えた。BGMは岡野貞一／作曲、高野辰之／作詞《春の小川》と、岡野貞一／作曲、高野辰之／作詞《もみじ》のオルゴール演奏を使用した。

（３）視聴覚資料③「岡野貞一『私の故郷』」

視聴覚資料③「岡野貞一『私の故郷』」は、岡野貞一にとっての故郷である鳥取の風景や、《ふるさと》で詠われている情景などを視聴覚資料として編集したものである。編集にあたって、使用した写真と、《ふるさと》の１番から３番で歌われている内容を結びつけるようにした。長さは１分３９秒で、視聴覚資料②と同様、写真にテロップを入れている。BGMは岡野貞一／作曲、高野辰之／作詞《ふるさと》のカラオケを使用した。

2. 授業実践の目的と方法

ここでは、開発した教材と指導案を基に行った授業実践について検討する。

授業実践の目的は、前述の「《ふるさと》を題材にした教材開発」において開発した視聴覚資料が有効であるかを、児童における授業中の反応ならびに視聴覚資料に対する評価や、授業実践前後の心情変化から考察することによって、検証することである。そこで、次のような仮説を立てた。

仮説

視聴覚資料①～③の鑑賞や「私の故郷」を見つける活動を通して、岡野貞一の生き方を知り、自分たちの身の回りの風景や人物に目を向けることができ、《ふるさと》や鳥取についてさらに好意的な心情変化を起こすことができると考える。

①対象

鳥取大学附属小学校６年生 73人

②場所

鳥取大学附属小学校音楽室

③実施時期・児童数

2015（平成27）年12月17日（水）4校時（11：20～12：05）・・・6年1組36人

2015（平成27）年12月18日（木）3校時（10：30～11：15）・・・6年2組37人

④記録方法

ビデオカメラ2台、デジタルカメラ1台、ボイスレコーダー1台によって採取した。後日、文字起こしを行った。

⑤題材名

「故郷を感じて《ふるさと》を歌おう。」

⑥準備物

自作の視聴覚資料①～③、イントロクイズ、イントロクイズの正解の貼り物、岡野貞一の写真、歌詞を書いた模造紙、ワークシート、パソコン

⑦ふり返しシート

授業実践の終わりに、両組ともアンケートとして「ふり返しシート」の記入を実施した。所要時間は10分程度で、授業時間内に行った。

3. 授業記録からの考察

授業実践は、事前に作成した学習指導案に基づき筆者の杉本が進めた。授業実践は2クラス行ったが、視聴覚資料への反応や、「私の故郷」を考える活動への取り組みがより顕著だった、6年2組での授業実践を分析の対象とすることとした。

まず、児童における視聴覚資料への関心・意欲について、授業記録から考察していきたい。授業実践の導入場面では、イントロクイズを行った。

T: では初めに、みんなに簡単なイントロクイズに挑戦してもらいたいと思います。

C: いえーい。(拍手)

T: 【拍手】

T: 答えがわかった人は、遠慮せずにその場で手を挙げて、曲名を教えてください。

2問しかないので、よく聴いて教えてください。

【視聴覚資料の準備をする】

じゃあイントロクイズいきます。第1問です。

【《もみじ》を流す】

C: (スクリーンに注目する)

C: (曲名がわかったような仕草をする)

C: (友だちと相談する)

C: (考える)

C: (ざわめき)

C: (挙手)

T: 【音楽を止める】

はい、わかった人。じゃあ一番早かったから、どうぞ。

C: はい。《もみじ》。

T: お！さあどうでしょう。

C: おお！

T: 【視聴覚資料を操作し正解を発表する】

C: おおー、すばらしい！(拍手)

注 Tは筆者、Cは児童を表している。()は児童の表情や動作、【 】は筆者の表情・動作を表している。

筆者の杉本がイントロクイズをすることを伝えると、児童から拍手が起こり、イントロクイズへの期待感が感じられた。実際に曲を流すと、ほとんどの児童がスクリーンに注目し、曲を聴いて友だちと相談したり、曲名を思い出そうと考える仕草をする児童の姿が見られたりしたことから、この活動に対して関心・意欲を持って取り組んでいる児童が多かったようにみて取れた。

次に、イントロクイズで扱った《もみじ》と《ふるさと》の2曲から、《ふるさと》や岡野貞一の話へつなげていった。2曲の共通点を尋ねると、作曲者が岡野貞一であることを知っている数人の児童から自然と発言があった。事前意識調査で、《ふるさと》の作曲者が岡野貞一であることを知っている児童が多いことが明らかになっており、その結果も関係していると考えられる。《もみじ》と《ふるさと》のどちらをよく耳にするかという問いかけに対しては、ほとんどの児童が《ふるさ

と》に挙手をした。児童の意識を《ふるさと》に集め、本時のめあての確認へつなげていくことができた。ここまでが導入である。

次に本時のめあてを確認した後、本時の展開部に入る。まず、《ふるさと》の1番だけを歌った。歌詞を書いた模造紙をホワイトボードに貼ったことで、児童は前を向いて歌うことができていた。声量もあり、メロディーを事前に確認しなくても全員が歌うことができていた。伴奏は筆者の杉本によるピアノ伴奏である。

《ふるさと》を歌い終わった後、《ふるさと》を歌っているときに何かイメージが浮かんだかと筆者がたずねると、「全然」と答えたり、首をかしげたりする児童が多く見られた。そこでまず、《ふるさと》の作曲者である岡野貞一の生涯を知ることから始めるため、視聴覚資料①を流す。

以下は、視聴覚資料①を流す前と鑑賞中の記録である。

T：・・・この《ふるさと》っていう曲を作った岡野貞一さんってどんな人かなっていうところからちょっと考えてみたいと思うんだけど、この岡野貞一さんを紹介する映像を今日先生は作ってきました。なのでそれを見てみてください。

C：(つぶやき)

C：すげー。

C：(笑顔)

C：楽しみ…。

T：【スライドを下げる】

では、流します。

【視聴覚資料「岡野貞一の生がい」を流す】

C：(視聴覚資料「岡野貞一の生がい」を見る)

C：(笑顔)

C：(つぶやき)

C：(スクリーンに注目する)



写真1 視聴覚資料①を見る児童の様子

視聴覚資料①を流す前に、児童のつぶやきや笑顔が見られ、「楽しみ」という言葉も聞こえてくるなど、児童が視聴覚資料を楽しみにしている様子が見て取れる。視聴覚資料を鑑賞する際も、つぶやいたり友だちと話したりする姿が見られ、ほとんどの児童がスクリーンに視線を集中させていた。このことから、視聴覚資料は児童の関心を集めやすく、期待感を得やすいのではないかと推察される。

その次に、「私の故郷」を考える活動に移る。「私の故郷」とは、児童にとって故郷、鳥取を感じられるもののことである。はじめに教師がワークシートの見本を見せ、活動内容の見通しを持てるようにした。場所、風景、人物など何でもよいので、身の回りから探してみたいと説明した。隣の友だちと相談しながら考えても良いことを伝え、ワークシートを配布した。以下は、「私の故郷」を考える活動の中で確認できた児童の会話の記録である。

C：んー、何だろう。

C：スクランブル交差点とか？

C : (なかなか思いつかない)
 T : 【児童のワークシートを見ながら】 それもいいよ。
 C : これでもいいんか。

C : だってな、あれってあそこにしかないが。
 C : うん、そうそう！

C : 森がある。道路のところに。
 C : ああ、森かー。

C : あれ世界に一つしかない。
 C : あー。

C : 湖山の神社とか…。
 C : ああ、神社。

児童はそれぞれ近くに座っている友だちと相談しながら考えていた。自分の家の周りや登下校で通る道、また行ったことのある場所など思い思いの場所を探している様子が見られた。「たくさんありすぎてどうしよう」と、イメージが次々に浮かんでくる児童もいた。一方で、なかなかイメージが浮かびにくいグループもあった。そこで、「鳥取と言えば？」と声かけをすると、児童からは「梨」「蟹」といったイメージが出てきた。教師の声かけによって、鳥取のイメージを思い浮かべるきっかけを作ることができた。また、授業後に回収したワークシートに挙げられた「私の故郷」を分類すると、①山、森、川、湖山池、鳥取砂丘といった自然環境、②鳥、犬、猫などの動物、③家、学校、公園、駅、バス停などの身近な建物や場所、④寺、神社、仁風閣などの文化的建造物、⑤大江の里、すなばコーヒーなどの飲食店、⑥マンガ、水木しげる、青山剛昌などのサブカルチャーに関するもの、⑦和紙などの文化、⑧梨、蟹、らっきょうなどの食に関するもの、⑨家族、友だち、近所のおばさんなどの人的環境、⑩静か、いなか、人口の少なさ、高い建物が無いなどの鳥取の特徴の10グループに分類することができた。その他、本時の授業内容に関わって、「お昼に流れる《ふるさと》の音楽」と書いている児童もいた。ここまで多くの「私の故郷」が出てくるとは予想しておらず、驚いた。この活動を通して、児童は自分の身の回りの身近な環境に目を向けることができたのではないかと推察できる。

次に、児童の中から出てきた「私の故郷」を発表し合う時間を設けた。以下がその時のやりとりの一部の記録である。

T : はい。じゃあ、まだ書き足りないっていう人もいるかもしれないけどちょっと思い浮かばないっていう人もいるみたいなので、ここでちょっと、みんなの「私の故郷」を紹介してほしいんですけど、じゃあまず、発表してくれる人？
 どうかかな？
 C : (挙手)

T：はい，じゃあまず一個，教えてください。特にこれっていうの。

児童A：えっと，汽車からいつもみえる風景が…。

C：（友だちと相談する）

T：【板書する】

毎日汽車で通ってるから…。

他に紹介してくれる人？はい，どうぞ。

児童B：近所のおばさん。

C：（笑い声）

C：なんでー。

C：おばさん？

C：（ざわめき）

T：【板書する】

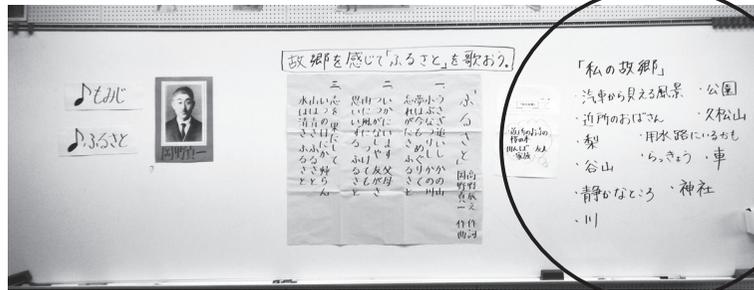


写真2 板書

「私の故郷」の発表場面では，まず2人の児童から挙手があった。挙手がなくなったところで，リレー方式で児童同士が指名し合いながら進めていくことにした。その際，男女交互に指名するように指示した。出てきた意見は筆者が板書していく。児童からは，写真2の板書に示した意見が出てきた。友だちの発表を聞きながら笑いがおきたり，つぶやいたりする児童の姿が見られたことから，友だちの意見を聞くことを楽しんでいる児童が多かったのではないかと推察される。また，前の活動でなかなか「私の故郷」を見つけられなかった児童も，友だちの発表を聞いてうなずく姿が見られ，意見を共有する場を設けることによって，そういった児童の鳥取に対するイメージをふくらませることにつながったと考えられる。

「私の故郷」を発表したあと，視聴覚資料②と③を鑑賞する時間に移る。自分たちが考えた「私の故郷」と，視聴覚資料に出てくる風景などを比べ合わせながら見てほしいと伝えた。以下は，視聴覚資料②を流す前と鑑賞中の記録である。

T：・・・はい，ということで，みんなのこんなたくさんの「私の故郷」がたくさん出てきたんだけど，ここで先生また二つ短い映像を作ってきました。一つ目は，何が出てくるかはお楽しみなんだけど，もしかしたらみんなが知ってる場所が出てくるかも，しれませんので。

【スクリーンを下ろす】

C：（ざわめき）

T：じゃあ，流します。

【視聴覚資料②「岡野貞一ゆかりの地をめぐる」を流す】

C：（視聴覚資料②「岡野貞一ゆかりの地をめぐる」を見る）

C：（指をさしながら友だちと話す）

C: (笑い声)

C: 知つとる…。

C: (スクリーンに注目する)

【視聴覚資料②「岡野貞一ゆかりの地をめぐって」終了】

視聴覚資料②「岡野貞一ゆかりの地をめぐって」の鑑賞時には、知っている場所が出てくると指をさしながら友だちと話したり、笑いながら鑑賞したりする児童の姿が見られた。また、「知つとる…」とつぶやく児童も見られた。鑑賞中は、ほとんどの児童が視線をスクリーンに注目させていた。自分の知っている場所が出てくることが、映像資料への関心を高めたのではないかと推察できる。次に、視聴覚資料③を鑑賞した。以下は、視聴覚資料③を流す前と鑑賞中の記録である。

【視聴覚資料③「岡野貞一『私の故郷』を流す】

C: (視聴覚資料③「岡野貞一『私の故郷』を見る)

C: (スクリーンに注目する)

C: すごい。

【視聴覚資料③「岡野貞一『私の故郷』終了】

視聴覚資料③「岡野貞一『私の故郷』」では、視聴覚資料②「岡野貞一ゆかりの地をめぐって」であったような友だち同士で話したり、笑い声が起こったりする児童の姿はあまり見られず、スクリーンに視線を注目させて静かに鑑賞する児童が多かった。これは、BGMとして使用した《ふるさと》のカラオケの演奏がやや重厚であることや、視聴覚資料の内容が《ふるさと》の曲に込められた思いなどを紹介するものであったことが影響していると考えられる。

視聴覚資料②と③を見た後に、《ふるさと》の1～3番を歌った。本時を通してふれた鳥取の風景などを思い浮かべながら歌ってほしいと伝えた。伴奏は前半と同様、筆者の杉本によるピアノ伴奏である。歌い出しの音量は前半に比べてやや小さく感じられたが、だんだんと大きくなっていき、3番まで歌い終えた。歌い出しの音量が小さかったのは、《ふるさと》を歌う前に鑑賞した、視聴覚資料の余韻が残っているからではないかと推察される。

《ふるさと》を歌い終えた後に、児童にふり返しシートを配布し、本時の振り返りを行った。このふり返しシートは、本時の内容や視聴覚資料について、また授業を受ける前と後での心情の変化などを問うものである。次に、ふり返しシートの結果に基づいて本時や視聴覚資料に対する児童の評価、児童の心情変化について考察したい。

4. ふり返しシートからの考察

授業実践後に児童に記入してもらったふり返しシートの集計結果から、本時や視聴覚資料に対する児童の評価、児童の心情変化について考察していく。集計結果は、2015(平成27)年12月17日と12月18日に行った両組の振り返りシートの合計で示している。

①目的

本調査は、《ふるさと》を題材とした教材開発行い、その有効性について検証する授業実践を受け

て、授業を受けた後の児童の授業に対する評価や、心情の変化の実態を明らかにすることを目的とする。

②調査対象

鳥取大学附属小学校6年生 73人

③調査方法

授業実践終了後、「ふり返しシート」として質問紙を配布し、児童に回答してもらった。回答時間は10分程度だった。「ふり返しシート」の記入は、授業時間内に行った。本時の視聴覚資料に対する児童の評価、授業を受ける前と受けた後で《ふるさと》や鳥取についての心情に変化があったかどうかを問うものである。有効回答率は、小数点以下を四捨五入している。

④実施日時・場所

6年1組：2015（平成27）年12月17日（水）4校時・鳥取大学附属小学校音楽室

6年2組：2015（平成27）年12月18日（木）3校時・鳥取大学附属小学校音楽室

図1は、児童における授業前の《ふるさと》に対する認識を示している。この結果より、「とても好きだった」と答えた児童は8人で11%である。「好きだった」と答えた児童は17人で23%である。「ふつう」と答えた児童は45人で62%である。「あまり好きではなかった」と答えた児童は3人で4%である。「きれいだった」と答えた児童はいなかった。「ふつう」と答えた児童の割合が62%と約6割であることから、授業を受ける前の児童は、《ふるさと》に対して中立的な認識をしていることがわかった。

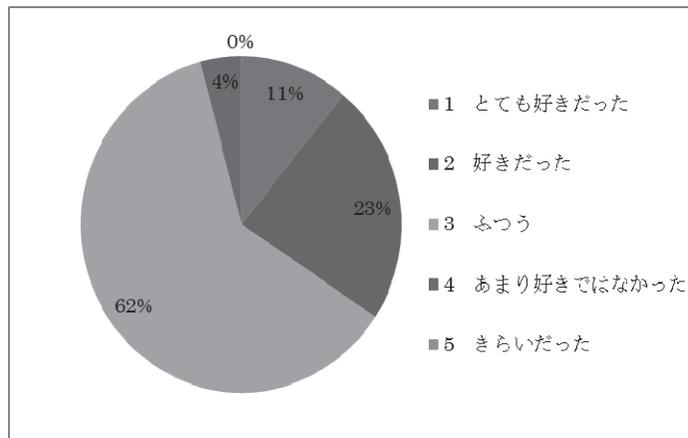


図1 「この授業を受ける前、「ふるさと」は好きでしたか」 有効回答率100%（73/73人）

図2は、児童における授業前の鳥取に対する認識を示している。この結果より、「とても好きだった」と答えた児童は17人で23%である。「好きだった」と答えた児童は21人で29%である。「ふつう」と答えた児童は27人で37%である。「あまり好きではなかった」と答えた児童は6人で、8%である。「きれいだった」と答えた児童は2人で3%である。「とても好きだった」、「好きだった」と答えた児童の割合は合わせて52%であることから、約半数の児童が鳥取に対して好意的な認識をしていることがわかった。

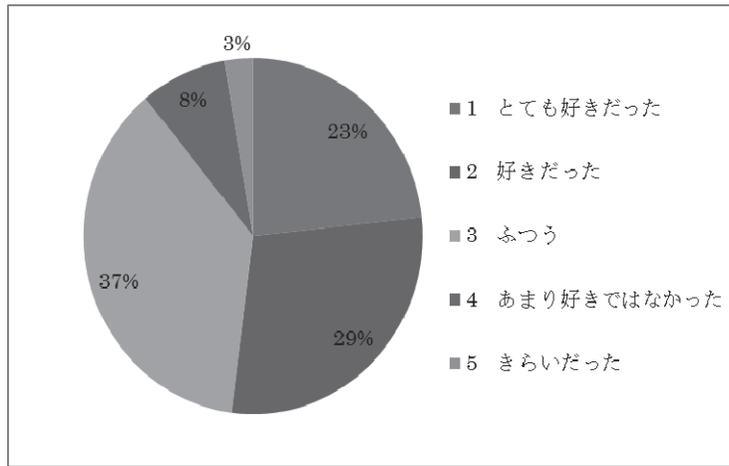


図2 「この授業を受ける前、鳥取は好きでしたか」 有効回答率100% (73/73人)

図3は、視聴覚資料に対する児童の評価を示している。この結果より、「とても面白かった」と答えた児童は23人で32%である。「面白かった」と答えた児童は29人で40%である。「ふつう」と答えた児童は17人で23%である。「あまり面白くなかった」と答えた児童は4人で5%である。「面白くなかった」と答えた児童はいなかった。「とても面白かった」、「面白かった」と答えた児童の割合は合わせて72%で、約7割の児童が視聴覚資料を面白いと感じていたことがわかった。

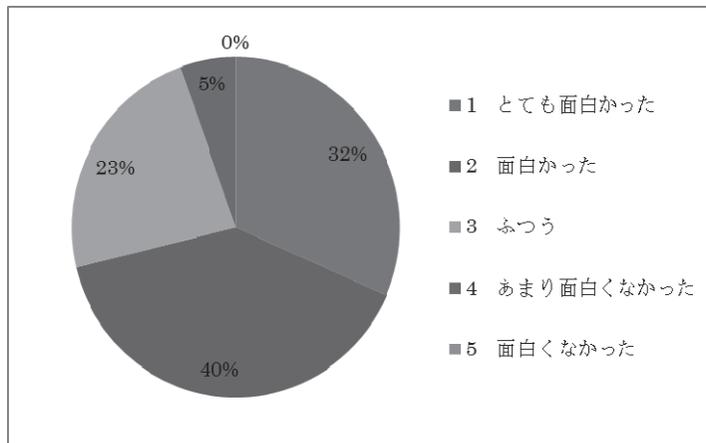


図3 「映像資料はどうでしたか」 有効回答率100% (73/73人)

図4は、視聴覚資料に使用した写真に対する児童の評価である。この結果より、「とてもよかった」と答えた児童は27人で37%である。「よかった」と答えた児童は28人で38%である。「ふつう」と答えた児童は17人で23%である。「あまりよくなかった」と答えた児童は1人で2%である。「よくなかった」と答えた児童はいなかった。「とてもよかった」、「よかった」と答えた児童の割合は合

わせて75%で、7.5割の児童が、視聴覚資料に使用した写真についてよかったと感じていることがわかった。

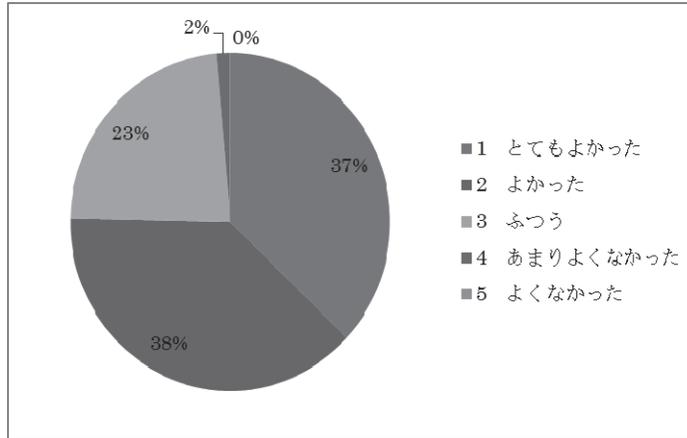


図4 「映像資料の写真はどうでしたか」 有効回答率100% (73/73人)

図5は、視聴覚資料のBGMに使用した音楽に対する児童の評価である。この結果より、「とてもよかった」と答えた児童は27人で38%である。「よかった」と答えた児童は29人で40%である。「ふつう」と答えた児童は13人で18%である。「あまりよくなかった」と答えた児童は3人で4%である。「よくなかった」と答えた児童はいなかった。「とてもよかった」、「よかった」と答えた児童の割合は合わせて78%で、約8割と多くの児童がよかったと感じていることがわかった。

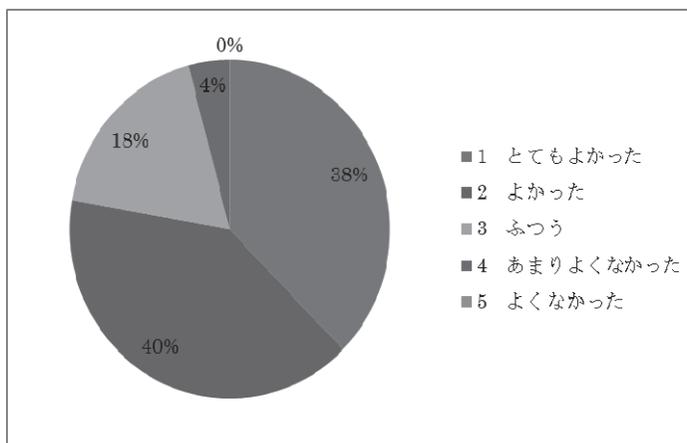


図5 「映像資料の音楽はどうでしたか」 有効回答率99% (72/73人)

図6は、児童における3つの視聴覚資料の中で一番印象に残っているものの割合を示している。この結果より、「岡野貞一の生がい」と答えた児童は22人で31%である。「岡野貞一ゆかりの地をめぐる」と答えた児童は27人で37%である。「岡野貞一『私の故郷』」と答えた児童は19人で26%である。「わからない」と答えた児童は4人で6%である。児童において3つの視聴覚資料の中で一

番印象に残っているのは、「岡野貞一ゆかりの地をめぐる」で、二番目に「岡野貞一の生がい」、三番目に「岡野貞一『私の故郷』」の順であることがわかった。また、「わからない」と答えた児童がいたことから、児童によっては授業が進むにつれ3つの視聴覚資料の内容が薄れていっている可能性が考えられる。

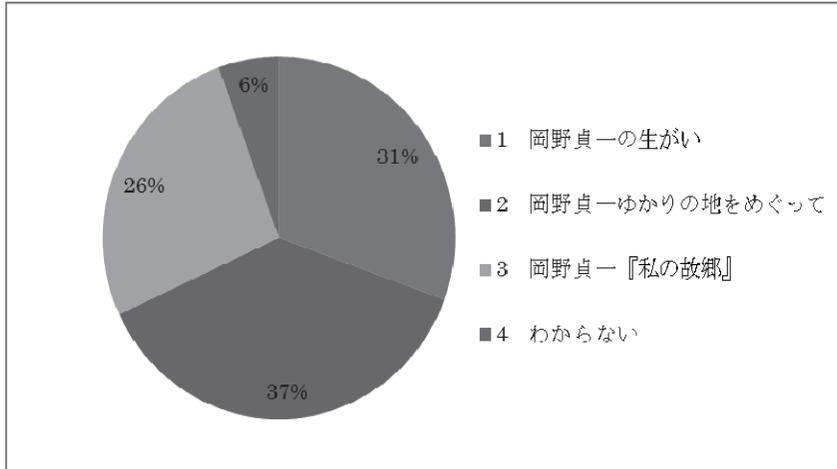


図6 「3つの映像資料の中で、一番印象に残っているものはどれですか」有効回答率99% (72/73人)

図7は、本時を通して児童が岡野貞一の生涯をどの程度知ることができたかを示している。この結果より、「とてもよくわかった」と答えた児童は24人で33%である。「わかった」と答えた児童は45人で62%である。「どちらでもない」と答えた児童は3人で4%である。「あまりわからなかった」と答えた児童は1人で1%である。「わからなかった」と答えた児童はいなかった。「とてもよくわかった」、「わかった」と答えた児童の割合は合わせて95%で、視聴覚資料によって児童に岡野貞一の生涯を効果的に伝えることができたと推察できる。

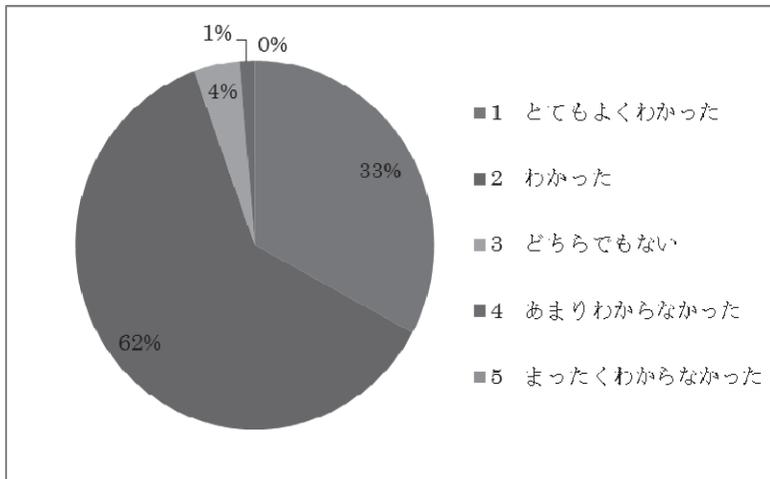


図7 「岡野貞一の生き方を知ることができましたか」有効回答率100% (73/73人)

図8は、児童における《ふるさと》に対する授業後の気持ちの変化の割合を示している。この結果より、「変わらない」と答えた児童は23人で31%である。「もっと好きになった」と答えた児童は18人で25%である。「少し好きになった」と答えた児童は32人で44%である。「少しきれいになった」、「きれいになった」と答えた児童はいなかった。「もっと好きになった」、「少し好きになった」と答えた児童の割合は合わせて69%で、約7割の児童が授業を受けて《ふるさと》に対してプラスの心情変化を示していることがわかった。また、「少しきれいになった」、「きれいになった」のマイナスの心情変化を示した児童はいなかった。

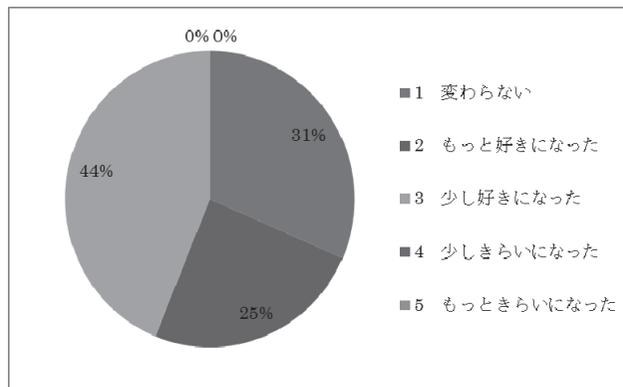


図8 「この授業を受けて、受ける前と「ふるさと」に対する気持ちは変わりましたか」

有効回答率 100% (73/73 人)

表1は、児童における《ふるさと》に対する授業前と授業後の心情変化についてクロス集計したものである。この結果より「とても好きだった」、「好きだった」と授業前の《ふるさと》に対する認識が好意的だった児童も、プラスの心情変化を起こしていることがわかった。また、「あまり好きではなかった」と答えた児童の中に、「少し好きになった」とややプラスの心情変化を起こしている児童がいることもわかった。

表1 授業後の《ふるさと》に対する心情変化

単位：人 (%)

授業前の心情変化	授業後の心情変化					合計
	もっと好きになった	少し好きになった	変わらない	少しきれいになった	もっときれいになった	
とても好きだった	5 (62.50)	1 (12.50)	2 (25.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	8 (100.00)
好きだった	5 (29.41)	8 (47.06)	4 (23.53)	0 (0.00)	0 (0.00)	17 (100.00)
ふつう	8 (17.78)	21 (46.67)	16 (35.56)	0 (0.00)	0 (0.00)	45 (100.00)
あまり好きではなかった	0 (0.00)	2 (66.67)	1 (33.33)	0 (0.00)	0 (0.00)	3 (100.00)
きれいだった	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (100.00)
合計	18 (24.66)	32 (43.84)	23 (31.51)	0 (0.00)	0 (0.00)	73 (100.00)

図9は、児童における鳥取に対する授業後の気持ちの変化の割合を示している。この結果より、「変わらない」と答えた児童は29人で40%である。「もっと好きになった」と答えた児童は15人で21%である。「少し好きになった」と答えた児童は28人で39%である。「少しきらいになった」、「きらいになった」と答えた児童はいなかった。「もっと好きになった」、「少し好きになった」と答えた児童の割合は合わせて60%で、6割の児童が授業を受けて鳥取に対してプラスの心情変化を示していることがわかった。また、「少しきらいになった」、「きらいになった」のマイナスの心情変化を示した児童はいなかった。

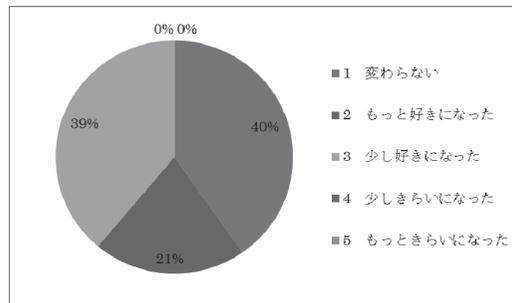


図9 「この授業を受けて、受ける前と鳥取に対する気持ちは変わりましたか」

有効回答率99% (72/73人)

表2は、児童における鳥取に対する授業前と授業後の心情変化についてクロス集計したものである。この結果より、《ふるさと》に対する心情変化と同様、「とても好きだった」、「好きだった」と授業前の鳥取に対する認識が好意的だった児童も、プラスの心情変化を起していることがわかった。また、「あまり好きではなかった」と答えた児童の中に、「少し好きになった」とややプラスの心情変化を起している児童がいることもわかった。

なお、授業後の《ふるさと》に対する心情変化の項目と授業後の鳥取に対する心情変化の項目間の相関係数を算出したところ、0.963であり、正の非常に高い関係がみられた。これらには高い関係があると推測される。

表2 授業後の鳥取に対する心情変化

単位：人 (%)

授業前の心情変化	授業後の心情変化					合計
	もっと好きになった	少し好きになった	変わらない	少しきらいになった	もっときらいになった	
とても好きだった	9 (52.94)	1 (5.88)	7 (41.18)	0 (0.00)	0 (0.00)	17 (100.00)
好きだった	5 (23.81)	6 (28.57)	10 (47.62)	0 (0.00)	0 (0.00)	21 (100.00)
ふつう	1 (3.70)	17 (62.96)	9 (33.33)	0 (0.00)	0 (0.00)	27 (100.00)
あまり好きではなかった	0 (0.00)	4 (66.67)	2 (33.33)	0 (0.00)	0 (0.00)	6 (100.00)
きらいだった	0 (0.00)	0 (0.00)	2 (100.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	2 (100.00)
合計	15 (20.83)	28 (38.89)	30 (41.10)	0 (0.00)	0 (0.00)	73 (100.00)

ふり返しシートの最後には、自由記述の感想欄を設けた。それらの感想をキーワードごとに、「岡野貞一に関する感想」、「鳥取市内の石碑、自然に関する感想」、「《ふるさと》に関する感想」、「鳥取に関する感想」、「授業内容に関する感想」、「その他」の6つに分類を行った。自由記述の内容が2つ以上の分類にまたがった場合は、それぞれカウントしている。73人全員から回答があり、全部で136件あった。主な感想について以下に列挙する。

◆「岡野貞一に関する感想」(66件, 48.5%)

- ・岡野貞一の生涯を知ることができた。
- ・岡野貞一はすごい。
- ・岡野貞一が一生懸命音楽に関わる仕事を頑張ったんだとわかった。
- ・岡野貞一がたくさん曲を作っていたことがわかった。
- ・岡野貞一や、彼が作曲した曲をもっと知りたい。

◆「鳥取市内の石碑、自然に関する感想」(4件, 2.9%)

- ・鳥取市内の石碑などを知ることができた。
- ・知っているところが出てきてよかった。
- ・映像で出てきた場所に今度行ってみたい。

◆「《ふるさと》に関する感想」(19件, 14.0%)

- ・曲の理解が深まった。
- ・《ふるさと》はいい曲。
- ・岡野貞一が曲に込めた思いがわかった。
- ・歌いながら風景を思い浮かべることができた。

◆「鳥取に関する感想」(13件, 9.6%)

- ・鳥取が好きになった。
- ・自分のふるさと鳥取について考えることができた。
- ・鳥取への考え方が変わった。

◆「授業内容に関する感想」(25件, 18.4%)

- ・映像資料がわかりやすかった。
- ・授業内容がよかった。
- ・面白かった。

◆「その他」(9件, 6.6%)

- ・普段《ふるさと》を1～3番まで歌うことが少ないので、良い機会になった。
- ・映像の写真の切り替わりが早くてわかりにくかった。
- ・映像資料を普段の学習でも使って欲しい。
- ・いつもの授業とは違っていて新鮮だった。
- ・わからないこともあった。

有効回答率 100% (73/73人)

この結果より、最も多かったのは「岡野貞一に関する感想」で、視聴覚資料によって岡野貞一の生涯を知ることができたという感想が多かった。また、岡野貞一が《ふるさと》の他に多くの曲を

作曲していたことがわかり驚いたという感想も多かった。「鳥取市内の石碑，自然に関する感想」では，自分の知っているところが出てきてよかったという感想のほか，実際にその場所に行ってみたいという意欲を示す感想も見られた。「《ふるさと》に関する感想」では，曲の理解が深まった，岡野貞一が曲に込めた思いがわかった，という感想が挙げられた。風景を思い浮かべながら歌うことができた児童もおり，本時のめあてを概ね達成できている児童もいることがわかった。「鳥取に関する感想」では，鳥取について考えることができたという感想が多く，身近な環境に目を向けることができた児童がいることがわかった。「授業内容に関する感想」では，視聴覚資料がわかりやすかったという感想が多かった。作成した映像資料が，概ね児童の学習に見合った内容であったと考えられる。「その他」では，視聴覚資料を使った授業が新鮮だったという感想もあったが，一方で映像の切り替わりが早く，わかりにくかったという感想もあった。視聴覚資料については，まだまだ改善の余地があると考えられる。全体を通して，岡野貞一についてもっと知りたい，視聴覚資料に出てきた場所に行ってみたくといった学習意欲が高まった児童がいることから，この教材が鳥取や岡野貞一に目を向ける一つのきっかけになっていると言える。

おわりに

以上，児童における視聴覚資料への関心・意欲については授業記録から，児童における授業内容や教材に対する評価と心情変化についてはふり返しシートから考察してきた。これらの結果から視聴覚資料の有効性について検討していきたい。

まず，児童における視聴覚資料への関心・意欲である。授業の導入部分では，イントロクイズという児童が親しみやすい方法を取り入れることで，本時の内容へと児童の関心を集めることができた。視聴覚資料①～③については，児童から「楽しみ」という言葉も聞こえてくるなど，児童が視聴覚資料に期待感を持っていると言える。ほとんどの児童がスクリーンに視線を集中させていたことから，視聴覚資料が効果的に児童の関心を集めることができていたと言える。また，ふり返しシートの結果から，児童が視聴覚資料に対して好意的にとらえていることが明らかになった。これは，視聴覚資料に使用した写真が，児童にとって身近な場所を取り上げていたことも影響していると考えられる。

次に，児童における授業前と授業後の心情変化についてである。ふり返しシートの結果から，69%の児童が授業後に《ふるさと》に対して好意的な心情変化を起こしていることが明らかになった。また，60%の児童が授業後に鳥取に対して好意的な心情変化を起こしていることも明らかになった。事前意識調査から，もともと《ふるさと》や鳥取に対して好意的な認識を持つ児童が多かったことが明らかになったが，授業後にさらに好意的な心情変化をもたらすことができたことが明らかになった。

視聴覚資料については，ふり返しシートの結果から，「とても面白かった」「面白かった」と答えた児童の割合が合わせて72%であることが明らかになった。授業内容や視聴覚資料に対して，児童における満足度はやや高いと言える。

また，視聴覚資料とは別に，授業の中でワークシートを使って「私の故郷」を考える活動を取り入れた。授業後に回収したワークシートから，この活動によって児童は身の回りの身近な環境に目を向け，様々な「私の故郷」を見つけることができていたと言える。その他，ふり返しシートの自由記述から，児童によってはさらなる学習意欲を高めることができたことが明らかになった。

このことから，《ふるさと》や岡野貞一を取り上げた視聴覚資料を教材として取り入れることで，

児童が自分たちの身の回りの身近な環境に目を向けることができ、児童における《ふるさと》や鳥取に対する愛着をある程度高めることができたと推察される。また、岡野貞一という鳥取県出身の作曲家を取り上げることで、その生き方や《ふるさと》の曲に込められた思いを児童が感じ取ることができたと考えられる。またこの結果は、視聴覚資料だけではなく、ワークシートを使った活動などを含めた授業全体を通して得られたものであると推察される。

一方、《ふるさと》の学習目標である「歌詞の内容を理解して、曲想を味わいながら歌いましょう」については、どの程度達成できたか十分に明らかにすることができなかった。本研究における授業実践が音楽科における授業を想定していることを考えると、この授業実践での学びを、学習計画全体を通じた《ふるさと》の歌唱に活かすことができるような指導を考えていかななくてはならない。

謝辞

本研究を行うにあたり、「とっとり童謡唱歌の会」の会長の鈴木恵一先生からのご協力を得ました。また、授業実践ならびに視聴覚資料の作成、配付（鳥取市内の全小学校）にあたり、鳥取大学附属小学校教諭の大野桂先生からのご協力を得ました。ここに記して、感謝の意を表します。

付記

本稿は2015（平成27）年度鳥取大学地域学部卒業論文「鳥取への愛着を育てる教材開発：岡野貞一《ふるさと》に着目して」の一部である。また、本稿の一部を日本音楽教育学会中国四国地区例会（2016年2月、於：香川大学）において口頭発表を行った。なお、視聴覚資料の作成、配付にあたり、平成27年度鳥取大学地域学部の学部長経費「鳥取への愛着を育てる教材開発」の助成を受けた。

注

- ¹ 嶋田由美・津田正之・江田司・中山三恵子・後藤丹「『歌唱共通教材』－〈研究者として、教育実践者として〉その意義と今後を考える－」日本音楽教育学会編『音楽教育学』第44-2号、2014年、pp47-54。
- ² 吹浦忠正『一歌い継ぎたい日本の心－愛唱歌 とおきの話』海竜社、2003年。
- ³ 現行の小学校学習指導要領では、第6学年の共通教材4曲のうち3曲を取り扱うことになっているため、すべての児童が《ふるさと》を学習するとは限らない。
- ⁴ 鳥取市教育委員会『鳥取市の志』、「音楽に一生を捧げた人生～岡野貞一～」、2013年、pp37-41。
- ⁵ 小原光一、飯沼信義、浦田健次郎 監修『小学生の音楽 6』教育芸術社、2015年、pp38-39。
- ⁶ 新美徳英 監修『小学音楽 音楽のおくりもの6』教育出版株式会社、2015年、pp40-41。
- ⁷ 鳥取県 HP、鳥取県人口移動調査（平成27年11月1日現在）、
<http://www.pref.tottori.lg.jp/253090.htm>、2015年12月25日閲覧。
- ⁸ 鳥取県 HP、平成27年10月の年齢5歳階級別、男女別県外転出入者数、
<tp://www.pref.tottori.lg.jp/253090.htm>、2015年12月25日閲覧。
- ⁹ 鳥取市教育委員会『鳥取市の志』「音楽に一生を捧げた人生～岡野貞一～」、2013年、pp.37-41、
<http://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1391674936485/activesqr/common/other/52f87c3c002.pdf>、2015年6月3日閲覧。

（2016年9月30日受付、2016年10月7日受理）